

◆目的◆ 高齢者の安全で快適な室内温熱環境に関する研究の一環として、より詳細な基礎的資料を得ることを目的に、青年、中年、高齢者の各年齢層での夏期および冬期の住宅温熱環境に関する意識、設備と居住者の住まい方の実態に関してアンケート調査を行い、その概要を把握し加齢による温熱的対応の変化を明らかにする。また、高齢者については属性や住まい方、冷暖房器具の使用状況を明らかにし、特徴および問題点を把握する。

◆方法◆ 調査は夏期および冬期に分けて行った。調査項目は、居住者および住宅の属性、住み方状況、日常的な生活行動、冷暖房器具の使用状況と冷暖房器具に対する意識に関してである。調査対象は青年は18～39歳、中年は40～59歳、高齢者は60歳以上の者とし、夏期は関西地区および広島県、冬期は関西地区で行った。調査期間は夏期は平成4年8～9月、冬期は2～3月で、アンケート配付数は夏期563票、冬期427票、有効回答数は夏期541票（内、青年124票、中年195票、高齢者222票）、冬期は393票（内、青年112票、中年111票、高齢者170票）で有効回収率は夏期96%、冬期92%であった。

◆結果◆ 加齢とともに日常の着衣枚数、睡眠中のトイレ回数、睡眠中に目が覚める割合が増加する傾向が夏期・冬期共にみられた。夏期には高齢者ではクーラー利用が減少し扇風機利用が増加し、冬期には石油・ガスストーブを最もよく利用する人が青年・中年層よりも多くみられた。これらの機器使用状況には暑さ・寒さに対する感覚や体格、住宅の建築年数などの要因が関わっており、夏期と冬期ではその傾向に差がみられることが明らかになった。